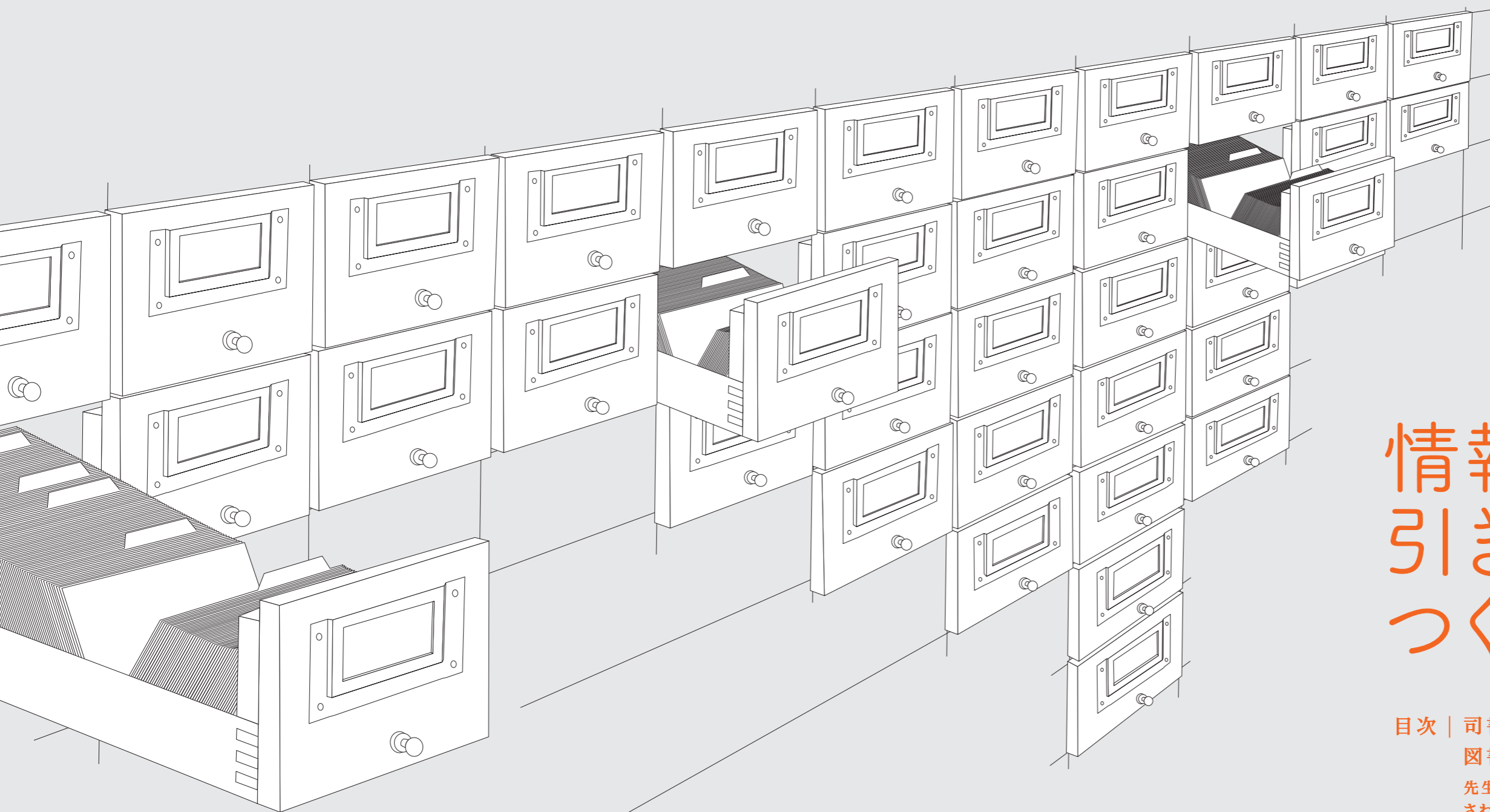


図書館学

昭和女子大学図書館学課程ニューズレター

Newsletter



2022 00

情報の 引き出しの つくりかた

目次 | 司書が「情報」と向き合うには
図書館におけるDXへの取り組み
先生からのmessage
さわる絵本プロジェクト
本の病院ワークショップ
世田谷区立下馬図書館との取り組み
国際子ども図書館体験記
図書館学課程DATA

司書が「情報」と向き合うには

はじめに

私たちは利用者のニーズにどう応えればよいのでしょうか。図書館では利用者のニーズに応えるために日々の業務を組み立て、全ての所属員がそれぞれの分掌に応じて最善を尽くしていることと思います。利用者の形態は様々であることは承知していますが、本稿が想定する利用者とは、何らかの情報を得るために図書館に來訪する方です。利用者への情報提供にあたり、司書および図書館組織はどのような情報を収集し、どのように情報の組織化へ取り組み、研鑽を重ねればよいのでしょうか。

▼武蔵野ふるさと歴史館

筆者は基礎自治体が設置する博物館・公文書館^{※1}の複合施設である武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館(以下当館)に身を置くアーキビスト^{※2}ですが、経歴のひとつとして専門図書館における業務も経験しており、図書館・博物館・公文書館の専門業務に携わってきました。本稿は筆者が利用者のニーズにどのように応えているのかについての事例紹介ですが、司書および司書を目指す方々の学びの参考となれば幸いです。

目玉コンテンツとLMA連携^{※3}

現在、図書館が求められる利用者のニーズは、所属員個人の努力のみで満足させ得るほど量的・質的に低いものではありません。情報の更新・増加の度合いは過去とは比べられないほど急速かつ膨大なものです。ゆえに図書館は組織全体、場合によっては図書館業界全体で、短期あるいは中長期的なスパンで様々な取り組みを行っていることと思います。

○L・M・Aの連携

単館の努力のみでは限界がありますから、これを克服するために図書館業界全体が連携していますし、これに加えてL・M・Aの連携が叫ばれるようになって長い年月が経っています。利用者のニーズに応えるための素晴らしい取り組みであり、私たちが今後も取り組むべき課題のひとつでしょう。

私たちは職務経験が長くなればなるほど、どの情報がどこから得られるのか想像が付きやすくなります。「自分のところには資料が無い」という判断もまた比較的早期の段階でつき、「あそこならあるかもしれない」という候補も挙がりやすくなるものです。

候補の選出と一つ一つこれを潰す反復作業は、私たち情報を取り扱う者の基本的なスキルのひとつですし、日常的に行っているものです。これが十分な検討や絞り込みがなされないまま利用者に提供されLMA連携というレールに乗ってしまうと、他館への丸投げという現象を惹起します。

○武蔵製作所

少し長くなりますが、筆者の勤務先である武蔵野市を例に示します。当市には航空機メーカー中島飛行機株式会社の発動機

工場である武蔵製作所が存在していました。最新かつ巨大な工場であったことから東日本で最初に米戦略爆撃機B29の爆撃目標となり、1944年11月24日以降終戦まで9回にわたる空襲を受けることとなりました。

現在、戦争の惨禍を忘れないようにするため当市は各種の事業に取り組んでおり、当館も中島飛行機に関する展示を2014年の開館以来繰り返し実施してきました。その過程で様々な資料を収集し、研究成果を蓄積しており、比較的人気があるコンテンツに育っています。

これにより市の内外を問わず中島飛行機に関するレファレンス^{※4}が舞い込むようになりましたが、これがレフェラル^{※5}の結果であることも少なくありません。最も悪い例を示すならば、「中島のことを調べているなら貴館に行けと言われたので来た」という利用者が当館から望むような情報を得ることができず、失望と共に去らざるを得ない、といった事例を想起されるとよいでしょう。

組織化の陥穽^{かんせい}^{※6}

前段のような不幸はなぜ起こるのでしょうか。当館の武蔵製作所に関する展示は「戦争と武蔵野」としており、同一タイトルにローマ数字による序数(例:2022年度はⅧ)を付したのみとしています。当然、展示ではタイトル通り市域における戦争の歴史を取り扱っており、金属供出、身近な人々の出征、被害を最小化するための各種取り組み、実際の被害の実態といったおなじみのテーマで構成しています。

○武蔵野ふるさと歴史館の展示

しかし、当館の展示がリピーターに恵まれているのは、展示資料に米国国立公文

書館から収集した資料を活用していることです。米空母艦載機による空襲の実態を解き明かすことは他の基礎自治体設置博物館では取り組みにくいことで、これに加えて当館が公文書館でもあることから所蔵する歴史公文書を併用することができます。これにより、米軍・武蔵野町側という被害・加害両方の視点から展示を複眼的に構成することができるともまた評価される点でもあります。

さらに2022年度は新規寄贈資料である武蔵製作所所員・近藤さんの「寄せ書き」を用いました。「寄せ書き」はフィリピン戦線で米兵が拾得したというバックストーリーを持っていることから新聞等にも取り上げていただくことができ、2週間の会期中に2,600人を超える来館者を迎えることができました。

○司書の仕事との接点

前置きが長くなりましたが、ここからが司書の仕事との接点です。当館では展覧会名と同名の図録を開催の度に刊行しており、図書館等にも寄贈しています。これが司書の目に入れば、「戦争に関する武蔵野市域の歴史の展示にかかる図書」と理解し組織化にあたりNDC^{※7}ならば200番台^{※8}を付与することになるでしょう。NDLSH^{※9}から件名を付与するならば「戦争」「歴史」など埋没しやすいものにとどまる可能性もあります。

しかし、利用者は容赦ありません。「フィリピンで拾ったという資料を展示した館の図録が見たい」「米空母Bunker Hillを表紙にした図録があると聞いた。どこの図録だろうか」というレファレンスが寄せられることは想像に難くありません。不幸にも当館の図録にたどり着けなかった司書が「こんなに具体的な情報を言っているのに、書名ひとつ分からないなんて」という台詞を利用者から投げかけられているとしたら、私は各館の司書を大いに苦しめているに違いありません。

○中島飛行機

戦中の中島飛行機は三菱に並ぶほどの航

空機メーカーでしたから、「中島飛行機のことを調べたい」という利用者が当館を紹介されることがあります。ですが、述べてきたように当館は当市に存在していた武蔵製作所のことを中心に資料を収集していることから、中島飛行機の三島製作所(静岡県)や太田製作所(群馬県)に関する資料はごくわずかしか所蔵していません。ソース^{※10}としては上位概念である「中島飛行機」から絞り込むと先のような不幸が発生するわけです。

原資料が含む情報の抽出

中島飛行機はその名が示す通り中島知久平が創業した企業です。知久平は海軍を退いたあとに企業家へ転身し、さらに政治家として政友会総裁から大臣にまでなるという異色の経歴を持っています。私たちはNDCに伝記という分類を持っていますから、知久平という個人名による検索は比較的容易でしょう。知久平を軍事史の視点から、経営学の視点から、政治学の視点から探そうとする利用者が想定されるならば、私たちは件名を付与することで乗り越えることもできるでしょう。

○博物館の現場

翻って、現物の資料を取り扱う博物館の現場ではどうでしょうか。当館は武蔵製作所の副所長を務めた長澤雄次が戦時中に書き残した手帳を所蔵しています。彼は東北帝国大学を卒業していますが、利用者が手帳を東北大学の卒業生資料として把握して当館にたどり着くのは極めて困難でしょう。彼は大宮製作所や第14製造廠(大谷石の採石場跡を利用した)の所長を歴任していますが、さいたま市(旧大宮市を合併して成立した政令市)や大谷町の歴史を調べる利用者がこの手帳にたどり着

くのはどんなに難しいことでしょうか。

○ 組織化のシステム

図書館(学)は組織化のシステムを十分に準備していますが、博物館がそれほどのシステムを用いて所蔵資料が持つ背景情報を十分に抽出しているかという点と遠く及ばないというのが実情です。試みに各館の図録を任意に10冊手に取りひも解いてごらん下さい。内容から件名を付与する作業がいかに困難なのかは即座に理解できるはずです。

ましてや個別の原資料が含み得る全ての統制語を抽出するというのは事実上不可能と言って差し支えないのではないのでしょうか。これは学問のあり方という問題ではなく、原資料が含む情報が無限にあり、利用者によってそのニーズが同様に無限に広がっていることにほかなりません。

私たちは何ができるのか

組織・個人いずれも多くの努力が必要です。組織においては、LMA連携に要するより高次の情報を蓄積して組織化することに努めています。様々なデータベースが作成されており、私たちのレファレンス業務^{※11}を助けてくれていることは言うまでもないことでしょう。

○ データベースの横断化

しかし、残念なことに組織化の対象が大きければ大きいほど様々な要素が埋没してしまうのもまた事実です。組織化の過程で注目すべきは、現物の資料から遠のけば遠のくほど様々な要素を「捨象」としているという事実です。埋没を回避せんがためにデータベースを横断化させ巨大化するのとは一つの対処法です。

○ 情報管理

一方、全文検索に頼っているだけでは言い換えによって失われてしまった言葉等は検索の対象となり得ず、半永久的に検索ワードとなりません。筆者個人の感想ですが、データベースの扱いにおいて絞り込みの技術がますます重要になっているにも関わらず、シソーラスの活用など図書館学が積み重ねてきた情報管理における伝統的な技術がなおざりにされているのは大変残念です。

○ 情報を取り扱う技術 + α

所属員個人の努力はどうでしょうか。レファレンスクエスト^{※12}のスキルを高めるよう研鑽を重ね、データベースの活用にあたり先に述べた検索ワードとなり得る「失われてしまった言葉」「同時代の言葉」にも習熟するなど情報を取り扱う技術のプラスアルファが求められるでしょう。

○ 現物資料へのアプローチ

この際に検索(システム)の限界を知り、現物資料へのアプローチが常にあり得ることを心の片隅にでも置いておくことは、司書の心の支えになるのではないのでしょうか。多様な切り口に耐えられる素材は私たちにとってとても魅力的ですが、活用が無限大であるという将来性そのものに光をあてることも大切です。

第一選択肢に「図書館」が残る意味

○ 情報手段としての図書館

膨大な情報に満ち溢れる現代において、多くの人々が情報の波に翻弄されています。情報の荒波に飲み込まれまいと人は様々なモノに縋りつき、あるいは身近な人に教えを請い、あるいはパソコンで検索する人が多い中で、その足を図書館に向け

た利用者は幸いです。情報の提供手段が多数準備されている現代においても、なお図書館は重要な情報入手の場であることに変わりありません。

○ 公文書館

筆者が奉職している施設は公文書館機能を有していますが、この言葉はまだこの国に定着しきれていません。国立はもちろん外務省、防衛省、宮内庁も自前の公文書館施設を持っていますが、都道府県の中には設置に至っていない県もあります。市町村と呼ばれる基礎自治体に至っては公文書館設置率がわずか3%程度です。

○ 図書館

一方で図書館はどうでしょうか?幸いにも図書館ということばは非常にわかりやすく、図書が納められた館であることは誰にでも想像がつかます。誰も一度くらいは図書館に入った経験を有しているという強みもあります。「調べる」の第一選択肢として「図書館へ行く」が残るのは、司書はじめ図書館行政に携わった先人たちの努力の賜物です。

この財産をいかに継承し発展させ、どのように次代へ引き継いでいくべきか私たちは常に考え続けなければなりません。「図書館への信頼感」は決して失ってはならず、第一選択肢に図書館が残る状態は引き続き維持されるべきです。

人によって見え方は違う

○ 「図書館での調べ方が分からない」

しかし、図書館は利用者をあたたかく迎えているのでしょうか。せっかく辿り着いた図書館であっても、私たちが整然と排架した図書は利用者にはただの大壁にしか見え、その眼前に立ちはだかるのみかもし

れません。「図書館での調べ方が分からない」という人は存外に多いものです。

○ 図書館利用教育

つまり我が国は図書館利用のための教育が貧弱であり、情報検索の工夫や知恵が十分に一般化されていないのです。図書館の排架が秩序だっていることに気づかない人がいたとしたら、例えばNDCで組織化されていること一つを教えるだけで書架の見え方は変わってくるでしょう。

○ 情報へのアプローチ

図書の背表紙に貼り付けられた三段ラベルの一番上に数字が書いてあること、その数字に意味があること、だからその数字を頼りにブラウジングすることで知りたい情報へのアプローチがいとも簡単に実現できるという体験を全ての人に積ませることがそんなに困難でしょうか。全ての人にあの分厚い真っ黒な冊子体『日本十進分類法』を丸暗記せよと言う必要は全くありません。NDCというものがあるということを知ればよいのです。

おわりにかえて

○ 司書の業務

情報機器が飛躍的に発達し、フルテキストの全文検索が極めて容易である現在、本来ならば多くの人は任意の情報を瞬時に手に入れているはずですが、そうではありません。自然語を検索エンジンによって検索する行為、サービス名を名指しで言うならばGoogleで検索をすることに慣れた人々はいくらでもいます。

彼らが「検索」に失敗した時に何と言いますか?そう、「検索キーワードが思い浮かばなかった」というでしょう。実はこの検索キーワードにたどり着く作業こそ司書の普

段の業務のすべてが集約されているのです。

○ シソーラス

私たちはレファレンスクエスト^{※13}によりいくつかの統制語の候補を固め、シソーラスを頼りに利用者が求める情報の外堀を埋めていきます。ある程度の絞り込みができればしめたもので、図書へのアプローチが格段に早まります。自分が知りたい情報を一言でまとめるというのは実は非常に困難な作業であり、だからこそ司書の真の実力はここで試されるのではないのでしょうか。

人と人のインターフェースはどんなに時代が進んでも変わりません。複雑な概念や抽象的な事象であればなおさらのことです。伝達手段がことばであることもしづらく変わりそうにありません。自然語の検索に慣れた人が増えた今こそ、統制語のシソーラスがもたらす効果を実感しやすい時代かもしれません。

○ レファレンスサービス

図書館には優れた司書がたくさんいらっしゃいます。研鑽に励み、整理を怠らず、手足となるレファレンスツール^{※13}を磨き上げ、いざという時のレフェラルサービスのリストを整備していると思います。ヴォルテールは「汝の幸せを、他人の幸せによって作れ」との名言を残していますが、私たちも利用者を自館から笑顔で送り出し、その幸せを分かち合える人間になりたいものです。

※1) 公文書館
歴史的に重要な公文書を一元的に保管し、一般に公開する機関および、その施設。

※2) アーキビスト
文書管理の専門家。公文書館や古文書館などの専門職員のほか、官公庁において公文書の管理と保管、あるいはその公開サービスにかかわる業務に従事する者や、企業などの文書管理担当者も含まれる。

※3) LMA連携→MLA連携
博物館(Museum)、図書館(Library)、文書館(Archives)の間で行われる連携・協力活動。ここではLを最初にもってきています。

※4) レファレンス
書物などの参考、参照、照会。

※5) →レフェラルサービス
利用者からの情報の依頼に対して、その分野の適切な専門家や専門機関を利用者に紹介するサービス

※6) 陥穽(かんせい)
おとしあな。また、人をだましたり失敗させたりするための計略。わな。はかりごと。

※7) NDC
日本十進分類法の略。図書分類法のひとつ。多くの図書館では、誰でも本を探しやすいように、NDCに従って並べられている。0~9のアラビア数字とピリオドを用いて、図書の主題を表す。

※8) 200番台
NDCの200番台。歴史・地理・伝記が分類される。

※9) NDLSh
国立国会図書館件名標目表。国立国会図書館が同館蔵書の主題検索のために作成した件名標目表。

※10) シソーラス
語句を意味的に分類し、類義語、反義語、上位語、下位語などの関係を記述した辞書。

※11) レファレンス業務→レファレンスサービス
何らかの情報あるいは資料を求めている図書館利用者に対して、図書館員が仲介的立場から、求められている情報あるいは資料を提供しないし提示することによって援助すること。

※12) レファレンスクエスト→レファレンス質問
図書館利用者が情報あるいは資料について図書館員に尋ねる質問。

※13) レファレンスツール
個々のレファレンス質問を回答する際に用いるレファレンス資料のこと。書誌、目録、辞典、辞書、図鑑、年表など。図書館職員が必要に応じて作成する新聞の切抜資料や郷土関係の索引といったその図書館で作成したツールも含まれる。



高野 弘之 たかの ひろゆき
武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館・公文書専門員。1976年東京生まれ、埼玉育ち。教師になり「子供たちに自作の教材を届けたい!」という思いから大学院に進学するも、なぜか博物館・文書館で働く道へ。2017年より現職。

Report

図書館におけるDXへの取り組み

1980年代からはじまるコンピュータ情報通信ネットワークを基盤とした社会づくりは、新たな段階に入った。現在、話題を集めているDX (Digital Transformation) ※の推進がそれを示している。日本では、2018年(平成30年)、経済産業省のデジタルトランスフォーメーションに向けた研究会が『DXレポート～ITシステム「2025年の崖」の克服とDXの本格的な展開～』を発表し、そこでDXへの取り組みに遅れると日本経済は2025年以降、年最大12兆円の経済的な損失を被るだろうという予測を明らかにして、企業での取り組みを促している。また、同省は、2021年(令和3年)『地域社会のDXに向けて』を発表して、企業から地域社会へその取り組みを広げようとしている。

DXは経済的な領域にとどまらず、社会全体の変革をもたらすものであり、図書館にも大きな影響を及ぼす。及ぼすと言うより、情報基盤の一角を占める図書館にとっては、積極的に取り組む課題と言わなければならない。

『地域社会のDXに向けて』では、DXの実現のための三つの段階を示している。それは、第1段階 デジタイゼーション (Digitization) = アナログ・物理データのデジタルデータ化、第2段階 デジタイゼーション (Digitalization) = 個別の業務・

製造プロセスのデジタル化、第3段階 デジタルトランスフォーメーション (Digital Transformation) = 組織横断/全体の業務・製造プロセスのデジタル化、“顧客起点の価値創出”のための事業やビジネスモデルの変革、というものである。

図書館に当てはめると、第1段階は、所蔵資料等のデジタル化、第2段階は、各種の技術の図書館への適用、第3段階は、図書館全体のデジタル化と利用者ニーズを起点とした新たなサービス・事業の創出ということになるだろう。

第1段階の資料等デジタル化は、日本では、1995年、G7のブリュッセルでの情報閣僚会議で決めた11のプロジェクトのうちのひとつ、電子図書館への取り組みからはじまる。11のプロジェクトは、1993年国連が提案したGII(世界情報基盤整備)を、G7が責任をもって実現するために設定したもので、それぞれに推進する幹事国を決めた。電子図書館は日本とフランスが幹事国となった。日本は、国立国会図書館、大学図書館が中心となって取り組んだ。これは、今も続いていて、公共図書館、専門図書館などに広がっている。第2段階は、資料の自動貸出・返却、ロボット、ドローンやビッグデータ・AIを活用した自動質問回答システムなど各種のものが、さらにさまざまなものが開発中である。第3段階

は、これからで、第1、2段階のデータ・技術の総合的な活用と地域社会、利用者に対する新たなサービス、事業の創出となるだろう。地域社会に対しては、地域の課題解決支援サービス等の充実、まちづくりなどから、住民の交流を通じた新たな知識・情報の創造の促進、それらを通じた貢献などが考えられる。

図書館におけるDXの推進は、図書館が情報基盤の一角を担うという点からみると、社会の情報環境の変革につながり、また、情報に関わる世界の歴史から見ると、「第3の情報革命」を実現することにもなる。「情報革命」とは、新しい知識、情報の記述方法と記録の方法が生まれ、人々の持っている知識、情報が各所で出会うことで次々と生まれ、社会の急激な変化をもたらすことを指す。

最初の情報革命は、紀元前7世紀、ギリシャで起こった。子音のアルファベットに母音を挿入して、話し言葉をそのまま書き取る技術が生まれ、パピルスの本(巻物)が多く作られ、流通し、知識、情報が次々と生まれる状況が出現した。第2の情報革命は、15世紀、ゲーテンベルクが活版印刷の技術を発明し、本が大量に作られ、流通して、知識、情報が次々と生まれ、大きな社会の変化をもたらした。現代では、コンピュータのディスクに文字、情報が記録さ

れ、それが通信ネットワークを通して流通し、知識、情報がネット上で出会って、次々と新しいものが生まれつつある。社会は大きく変わっていくだろうが、新しい社会に到達するには、数十年から半世紀の時間を要するに違いない。

日本で、2000年、IT基本法が制定され、それに基づき2001年e-JAPAN戦略が策定された。この時、政府は、これらによって新しい知識、情報、そして価値が創発する社会(「価値創発型社会」)の実現を目指すとした。計画は着実に実行されたが、「価値創発型社会」の実現にまだまだ多くの課題が残されている。DXの推進はそれらの課題を克服して、「価値創発型社会」を実現していくだろう。その中で、図書館も大きく姿を変えて行くだろうし、変えていかなければならない。挑戦する図書館とならなくてはならない。

※DXの定義にはさまざまなものがある。日本では経済産業省の定義が有名だが、これは経済の領域のもので、DXはもっと広い意味・内容が与えられる必要がある。そうした意味で、DXの定義として、今のところ一番近いものとして次のものがある。それは「進化したデジタル技術を活用し、ビジネスだけでなく人々の生活をより良い状態へ変革する」(出所、NTTCommunication。“DXとは何か?経済産業省の定義から活用事例まで徹底解説。”docomo business.(オンライン), 入手<<https://www.ntt.com/business/services/application/smartworkstyle/>

smartgo-staple/lp/article-cs01>。(参照2022-12-09。)

である。なお、ブリュッセルのG7情報閣僚会議とIT基本法等は、拙著『挑戦する図書館』(青弓社、2015年、p.36-39)また、経済産業省のレポートは、同省のホームページを参照されたい。



大串 夏身 おおぐし なつみ

東京都生まれ。小さい頃、ひどいじめにあっ
て、そのことを表現できるようにならなくてはと
早稲田大学文学部に入り、詩人長谷川龍生に師
事。卒業後東京都に司書として入り、後、昭和女
子大学に転じた。現在名誉教授。著作、図書館情
報学、中島みゆき、江戸東京学、社会運動史など
多数。

2022年度前期「情報サービス論」(横谷弘美先
生担当)のゲストスピーカーとして、お招きしま
した。

図書館学課程を 支えてくださった先生からの message



三澤 勝己 みさわ かつみ

高等学校社会科教諭から研究所勤務を経て、複数の大学の非常勤講師。関心のある分野は、図書・図書館史及び地域資料など。

2015年度から8年間にわたり、年度による科目の変遷はありましたが、「図書館サービス概論」「図書館情報資源概論」などを担当させていただきました。最初の授業で教室に入った際、多数の受講生が静かに待機している様子を見て、いささか緊張したことを今でも覚えています。私は社会人のスタートを私立女子高(豊島岡女子学園)教員からきりましたので、その当時の学校や教室の雰囲気とよく似ていて、そのことを懐かしく思い出しました。

高校の教員時代を振り返ると、その頃の学校はまだ学校図書館の活用があまり進められていませんでした。そのような状況の中で、手探りで学校図書館を活用する授業を展開しようと試みていました。情報リテラシーの育成や学校図書館と公共図書館の連携、という今日進められている事柄を、上記担当科目で説明する際に往時の経験が役立ちました。

次に教員から転じて、研究所に勤務しま

した。実業家の大倉邦彦先生が設置された大倉精神文化研究所です。東急東横線の大倉山駅から直ぐにある、専門図書館を附置した研究所です。そこでは、普段はレファレンスサービスの業務などを行っていました。時には、作家の方が執筆している作品に関連する質問で来所されることもありました。これらへの対応により、レファレンスサービスの力をつけることができました。

また、手がけた研究所の仕事の中に、解題の付された書誌の編集がありました。『新版日本思想史文献解題』というものです。これは、古代から幕末までを範囲として、日本思想史に関する基本的文献を収録した書誌です。1960年に『日本思想史文献解題』として角川書店から刊行されていますが、その新訂版として企画・編集されました。その刊行までには数年の歳月を費やしましたが、旧版と同じ角川書店から1992年に刊行されました。この新訂版は1960年の旧版の内容を大幅に補訂すると共に、多数の新規項目を加えて構成されています。ページ数は、旧版よりも150ページ以上分厚いものとなりました。

この新訂版の執筆には研究所の研究員のほかに、外部の方々100名ちかく関わっておられました。それらの方々への執筆依頼状の手配・原稿の受け取り(直接受け取りにうかがうこともありました)・各項目の様式の統一・索引の作成など、枚挙にいとまがない程の仕事がありました。当時はまだパソコンが普及しておらず、これらの仕事は手作業で大変でしたが、今から振り返ると書誌編集の実務を学ぶ

絶好の機会になりました。

なお、『新版日本思想史文献解題』が、『日本の参考図書』(第4版、日本図書館協会、2002年)の中で、日本思想のための基本文献に挙げられたことはとても嬉しく思いました。

研究所には、東京大学史料編纂所蔵資料を影写した「古文書・古記録影写副本」など複数のコレクションが所蔵されています。その中の一つに、「榊原文庫」というものがあります。これは、榊原康政を祖とする近世大名榊原家の蔵書のコレクションです。三代榊原忠次の収集した和漢書を中心としており、冊数は3000を越えるものです。私の在職していた当時はカード目録があるだけでしたので、コレクションの一つ一つに当たりながら目録を作成しました。これも、目録を作成する実務を知る貴重な機会となりました。

ここまで図書館に関する私の歩んできた道を、いささか述べさせていただきました。この8年間、授業の進め方としては、受講生の人数の関係から質疑応答を頻繁に行うことはできませんでしたが、なるべくゆっくり丁寧に説明することを心掛けました。受講生の皆さんは、熱心に参加してくれました。そのことを印象深く覚えております。

皆さんの益々のご活躍を、心から念じております。

図書館学課程に 着任された先生からの message

図書館地域資料とアーカイブズ

私は、2022年4月、本学歴史文化学科に着任しました。私の専門は歴史学・アーカイブズ学ですが、図書館に関する科目もいくつか担当しています(写真は歴史学での最近の仕事で、福島県立博物館・京都文化博物館で開催した企画展「新選組展2022」の監修をしたときのもの)。ここでは、簡単な自己紹介を通じて、大学で図書館・博物館・アーカイブズ(公文書館)について学ぶことの意味について、考えてみたいと思います。

私はこれまで、図書館を拠点に地域史を研究し、また図書館で古文書を中心とする地域資料サービスを担当したこともあります。また、図書館を拠点として編さんされた地域史編さん事業(小平市史)に長らく携わってきました。そうしたことから、本学の図書館司書課程でも、地域資料サービスを取り扱う図書館サービス特論と、デジタル情報を取り扱う図書館情報資源特論を担当しています。また、歴史文化学科では、2022年度からはじまったアーキビスト課程を担当しています。

図書館資料のなかに、その図書館でしか提供できない資料があります。図書館が所在する地域に関する資料—地域資料です。地域はさまざまで、ひとつとして同じ地域はありません。従って、その地域に関わる資料は、その図書館でしか提供できませ

ん。地域資料は、印刷・刊行されたものであっても少数のものが多いですし、世の中に一点しか存在しないのも多くあります。図書館が収集し、保存の手立てを講じた上で提供しなければ、失われてしまうかも知れません。図書館には、地域資料を守り伝えて行く重大な使命があるのです。

一般的に、図書館は著作遺産、博物館はモノ資料、公文書館は記録遺産を取り扱うと理解されています。しかし、たいへん残念なことに、基礎自治体ベースで見ると、町村では図書館未設置の自治体が多くあり、多くの博物館は博物館法の基準を満たしていません。アーカイブズに至っては、法制度の不十分さに加えて、館そのものが未だ200館に届きません。つまり、三つを十分に備えた自治体はほとんどない、というのが日本の文化状況です。私はこれまでさまざまな立場で図書館・博物館・アーカイブズに関わってきましたが、常々思うのは、それぞれの専門性の追求に加えて、日本の現状のなかで重要なのは、それぞれの専門性を超えて相互にサービスを補い、重複させることが必要だということです。アーカイブズがない自治体では、図書館は地域資料サービスの範疇でアーカイブズを補う必要があります。博物館も同様です。MLA連携という言葉聞いたことがあるかも知れませんが、それは、このような意

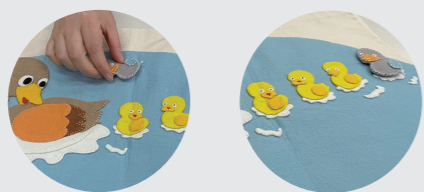
味で非常に切迫した問題なのです。

そんななか、本学では、歴史文化学科と日本語日本文化学科で、学芸員・司書・アーキビストについて学ぶことができ、資格の取得が可能です。文化に携わることに関心がある人にとって、このような環境は非常に恵まれたものだと思います。学芸員・司書・アーキビストは、相互に連携し、場合によっては一人の人が三つの役割を担いつつ、地域の文化を守り伝えていく役割を担っています。司書資格の取得を考えている方は、ぜひアーキビストや学芸員の講義も受講してみてください。



三野 行徳 みの ゆきのり

専門分野はアーカイブズ学、日本近世・近代史、多摩地域史、図書館地域資料論。多摩地域や北海道などで地域史の編さんと資料保存活動に携わる。歴史学の成果では、昨年に福島県立博物館・京都府京都文化博物館で開催した企画展「新選組展2022」の監修を担当。(写真はその時のもの)



Report さわる絵本プロジェクト

「さわる絵本プロジェクト」は本学現代ビジネス研究所認定プロジェクトと承認され、今年度から活動を開始しました。「さわる絵本」は布の絵本とも称され、遊具、機能回復訓練教材などに利用されています。

当プロジェクトでは、「さわる絵本」を学生自らが作成し、完成したものを病院や病児とその家族のための宿泊施設に寄付をしようと活動を行っています。11月の秋桜祭においても出展し、大盛況に終わりました。

入学して初めてプロジェクトに参加し、他学科の人や先輩との関わりを持つことができとても新鮮でした。大変なこともありましたが、先輩に助けていただいたり、秋桜祭の際にはプロジェクトのみんなで力を合わせて二日間ブースを展示できたりと、達成感がありました。手縫いの細かい作業が多く難しかったです。あまり手先が器用ではないほうなので、型紙通りの綺麗な形に制作することに苦戦しました。想像していたより大変でしたが、子ども達の手に渡って少しでも喜んでいただけたらいいなと思いながら作業をしました。(初等教育学科1年・吉住翔子)

さわる絵本プロジェクトを通して学部が全く違う先輩とのかかわりを作ることができ、とても嬉しかったです。趣味の話にとどまらず、就職活動に関するお話や大学生活、昭和女子大学に関する

ことなど様々なお話を聞かせていただいたりお話ししたりすることができました。とても心強い先輩方に囲まれて活動ができ、毎週の活動を楽しんで行うことができました。(環境デザイン学科1年・窪田真佑)

初めてのコロナ明けの文化祭、初めてのプロジェクト代表という事でなんの知識もない私に務まるか不安でしたが、文化祭当日は驚くほど大盛況でした。さわる絵本とは何かは分からなくとも、絵本が好きな人や小学生くらいの子供たちは足を運んでくれていたと感じました。普通の絵本は見慣れたものですが、さわる絵本については初めて目にする方が多く、好奇心を抱いてくれる方もいらっしゃいました。来年度は規模を拡大し、さわる絵本の種類・読み聞かせなどのパフォーマンスをより充実したいと考えております。よろしければ足を運んでさわる絵本と触れ合ってみてください。(歴史文化学科2年・工藤凜名)

さわる絵本プロジェクトは、布で名作絵本をつくる試みです。製作中には頼んだミシンが不良品だったなど大変なこともありましたが、今では良い思い出です。個人的に大変だったのは、布を型に沿って切り抜く作業です。曲線をハサミで裁断するのは慣れないと大変でしたし、絵本のパーツは小さいものが多いので、きれいな形に整えるだけでも一苦勞でした。楽しかったのは、絵本のページがどんどんと完成していく過程です。私が担当したページの鶏が、トサカとくちば

しを縫い付けて形になった瞬間は、うれしさがこみあげてきたことよく覚えています。そのほかにも様々な貴重なことを、このプロジェクトを通して経験をさせていただきました。来年もぜひ参加したいと思います。(心理学科2年・本田愛子)

最初に布絵本を見た時は「文字がないのに絵本と呼べるのか」という疑問を感じましたが、作成する中で「誰もが楽しめるユニバーサルデザイン」「文章がないことで無限の楽しみ方ができる」ことに気づきました。一冊の作品を作り上げるのは大変でしたが、メンバーと楽しい時間や達成感を共有することができました。ストーリーや絵、手触りを楽しみつつ、コミュニケーションツールのひとつとしても利用できるのではないかと思います。今度はオリジナルの物語なども作成してみたいです。(心理学科3年・八反田彩希)



池田美千絵 いけだ みちえ
さわる絵本プロジェクト担当。本の病院ワークショップ、選書体験、和綴ワークショップ、図書館見学にもかかわってきた。来年度からは世田谷区立下馬図書館との連携で絵本、本を作成するプロジェクトも担当予定。

From students

子どもたちが持参した本の壊れようを見て、素直に驚いた。そして、悲惨な本がヘルパーやのり入れ、ブックーの措置を施すときれいな状態になり、傷も目立たなくなつて感動した。子供たちの反応も良く、今回のイベントを通じて本を大切に扱ってほしいと思った。(英語コミュニケーション学科3年・佐竹ひまり)

今回、初めてブックーを用いて図鑑の修理を行い、参加者の方の大切な本を前に非常に緊張しましたが、下馬図書館の方にサポートしていただき、無事、参加者の方に喜んでいただける結果となったことから、責任の重さと達成した時の喜びを実感いたしました。また、本をヘルパーやのりで修理する方法だけではなく、糸とじの本で、ページが取れてしまった場合の修理方法など、様々な修理の仕方があることを学び、有意義な時間を過ごすことができました。(日本語日本文学科3年・岩井実咲)

ヘルパーやのりでの修理や、ブックーを貼る方法を知ることができてよかったです。また、きき紙に当たる部分に絵が描かれている本の時、その絵がカバーで隠れないようにしてブックーを貼る方法は目から鱗でした。参加者の方に教えながらの作業は自分でやる時とは全然違い、分かりやすい言葉を使ったり、作業しやすいように配慮したりと思った以上で大変でしたが、とても楽しかったです。普段はなかなか小学生と触れ合う機会がないため、このワークショップで小学生と一緒に作業することはとても良い経験になり、またこのような機会があれば是非参加したいと思いました。(S・H)

本の修理を通して、本への思い出に触れることができ、嬉しかったです。それぞれの参加者が、自分の大切な本の話をしてくださり、本と人との繋がりを感じることができました。(日本語日本文学科2年・古谷成実)

コロナウイルスにより、本の修繕を行う授業が行えなかったため、今回実際に体験することができ良い経験となりました。そして、他学科の学生や参加者の方など、様々な方と画面越しではない会話が久しぶりに出来たことがとても嬉しかったです。(英語コミュニケーション3年・原田揚羽)



本の病院 ワークショップ体験記

世田谷区立下馬図書館との取り組み

図書館学課程では、2022年度から世田谷区立下馬図書館とのコラボイベントを開催しています。記念すべき初年度には、「本の病院ワークショップ」と「選書見学」を行いました。普段の学びが活かされ、図書館と地域との関わりを肌で感じることでできる貴重な機会となりました。当コラボイベントは、学生の主体性が発揮される場でもあります。当日のイベントへ向けて、事前研修をしたり世田谷区立下馬図書館の方と打ち合わせを重ねたりと、

学生と図書館員と一緒に企画を作り上げていきました。図書館学課程履修者にとっては、司書という仕事の一部を垣間見ることのできるチャンスでもありました。大学外で得られる経験・気付きは、学生のみなさんが一段階成長する上で欠かせない糧となったことでしょう。

2023年度も世田谷区立下馬図書館と一緒に様々なイベントを開催する予定です。みなさんぜひ参加してみてください。(飯村祐乃)



今回は館内を説明付きで見学でき、かつ普段は入れない書庫へも入れて、大変貴重な経験だったと思う。明治時代に作られたものの歴史と、昭和、平成に作られた新しい技術の融合が随所で見られた。(心理学科2年・本田 愛子)

明治からある歴史ある建物で、図書館だけでなく建物の保存という役割も担っているということで、児童書を読む以外にも楽しみ方が沢山あると感じました。館内設備としては、明治時代には既に本のエレベーターがあったということに驚きました。(現代教養学科1年・佐久間みずほ)

私が特に印象的だった部分は、「世界を知る部屋」である。日本の絵本を右読みの言語圏ではない国の翻訳(左読み)になると、同時に挿絵も反転するというのは驚きだった。これは様々な国で出版されている絵本を並べることを可能にする「世界を知る部屋」だからこそ気づくことができる発見であったように思う。この発見は児童の異文化理解の第一歩につなげることができる。また、絵本を通じてSDGsについて学ぶことができるコーナーも設けられていてとても参考になった。将来、司書及び司書教諭になった時には、このような世界を知るきっかけになる学びの提供ができる工夫を施して、児童にとって図書館が身近な存在となるように尽力したい。(T・T)

国際子ども図書館には初めて行ったが、本と建物、どちらもとても素晴らしかった。本は、明治時代の絵本などが保管されていて、直接触ってみることができ、現代の絵本との違いを見ることができた。建物は昔から変わらず使われている扉やシャンデリアがあり、とても貴重な建物だと感じた。(O・T)

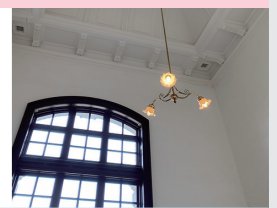
見学に参加して特に印象に残ったのは、児童書ギャラリーのコーナーです。戦前の児童書から、現代の児童書まで、全ての時代の児童書の歴史が一つに詰まった空間でした。あまりにも貴重な空間すぎて、国際子ども図書館のスタッフの方がツアーをしてくださったあとに、もう一度自ら足を運んでしまい、気付けば1時間以上もその場所で展示物に見とれてしまうほどでした。児童書の棚の壁などに、当時の時代の流行り物、歴史上の流れ・出来事が説明書きとして書かれており、その中で児童書がどのように変化していったのが詳しく書かれていました。そのため、自分の持っている知識と照らし合わせながら、児童書の変遷を自分の手で感じ取ることができました。(日本語日文学科3年・高松 妃菜)

図書館とは絵本や何かを調べるための資料が収集されているイメージが強かったため、書庫を見させてもらった際に見覚えのある雑誌などが置かれていたことが印象的でした。それ以外にもドリルなどの問題集も収集しているということを知った際には驚きました。(英語コミュニケーション学科3年・原田 揚羽)

地下の本の保管庫に入った時でした。保管庫に入る前に吸着マットのようなもので靴の裏についたほこりを取り除きました。また、室内は温度が22度、湿度が55%と定まっていた。これらは保管した本が傷まないよう行っていることだそうでした。ここまで徹底的に本のことを考えた対策が行われていることに驚きました。(英語コミュニケーション学科3年・蝦名 さやか)



国際子ども図書館体験記



見学で最も印象的だったものは、かつて貴賓室として使われていた「世界を知るへや」の床が寄木細工で作られていることです。音を吸収するための敷物があるわけではないので、歩くとコソコソ、コソコソ、と他のエリアでは聞けない良い音が響き、貴賓室であったことを印象づけるには充分でした。アーチ棟の地下にある書庫の本を一瞥したところ、保育園・小学校低学年の頃に観ていたアニメに関連した書籍を見つけてしまいました。本屋の児童向け雑誌コーナーで売られている類の本です。児童書を納めているのだから当たり前と言われれば当たり前なのですが、

「こういう本も集めているのか」と意外でした。(英語コミュニケーション学科3年・水鳥川 蒼)

前期に学校図書館メディアの構成の授業を受けて、学んだ内容を自分の目で見ることで楽しかった。子どもの部屋では、小さい子どもが本を取りやすいように本棚の高さが低くなっていて、さらに形がアーチを描いていた。天井は自然光が入るようになっていて、どこも明るく影ができる場所がなかった。本に影ができて暗くて読みにくいということがなく、子どもの視力の低下を止めるのに良い環境だと思った。(K・M)

司書資格取得者数・司書教諭単位修得者数

		令和元年度卒業生		令和2年度卒業生		令和3年度卒業生		令和4年度卒業生	
		司書	司書教諭※	司書	司書教諭※	司書	司書教諭※	司書	司書教諭※
人間文化学部	日本語日本文学科	26	4	33	2	41	2	23	6
	歴史文化学科	9	2	11	2	25	0	9	0
人間社会学部	心理学科	5	0	6	0	10	0	4	0
	福祉社会学科	0	0	4	0	0	0	0	0
	現代教養学科	28	0	7	0	13	0	4	1
	初等教育学科	1	15	0	6	1	12	0	11
生活科学部	環境デザイン学科	1	0	0	0	0	0	0	0
	健康デザイン学科	5	0	0	0	1	0	0	0
	管理栄養学科	0	0	0	0	0	0	0	0
グローバルビジネス学部	食品安全マネジメント学科	—	—	1	0	1	0	0	0
	ビジネスデザイン学科	2	0	0	0	1	0	0	0
	会計ファイナンス学科	—	—	—	—	0	0	0	0
国際学部	英語コミュニケーション学科	2	1	1	0	2	1	0	0
	国際学科	0	0	0	0	0	0	0	0
合計人数		79	22	63	10	95	15	40	18

※司書教諭は、単位修得済みの資格取得見込者数。 R2.3.31時点 R3.3.31時点 R4.3.16時点 R5.3.16時点

図書館学課程科目履修者延べ人数※

		令和元年度履修生		令和2年度履修生		令和3年度履修生		令和4年度履修生	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
人間文化学部	日本語日本文学科	283	291	263	281	233	183	209	194
	歴史文化学科	154	100	134	117	136	70	96	110
人間社会学部	心理学科	66	60	54	52	51	36	35	35
	福祉社会学科	15	22	8	5	7	1	2	1
	現代教養学科	76	82	65	73	47	38	36	32
	初等教育学科	43	32	40	19	43	23	46	15
生活科学部	環境デザイン学科	13	0	3	0	13	6	9	6
	健康デザイン学科	14	7	1	3	0	2	0	2
	管理栄養学科	0	0	0	0	2	0	0	0
	食品安全マネジメント学科	9	5	8	6	2	2	8	11
グローバルビジネス学部	ビジネスデザイン学科	3	6	4	4	5	0	2	7
	会計ファイナンス学科	0	0	0	0	4	3	6	8
国際学部	英語コミュニケーション学科	25	45	22	16	18	3	18	39
	国際学科	9	0	0	0	4	8	23	2
大学院		3	0	0	0	0	0	0	0
合計延べ人数		713	650	602	576	565	375	476	462

※ひとりに関係科目を2科目履修した場合は2名とカウント

「司書資格取得者数」が、今年度になり急激に減少した。新型コロナウイルスの蔓延や履修登録制度の改正など様々な要因が考えられるが、司書の非正規雇用が増加傾向にあることが履修意欲を妨げる根拠としてあるのかもしれない。取得した資格は、学生の今後の人生において揺るぎない武器であり自信となる。しかし、一生懸命取得した資格を直接職業に結び付けるのが困難だと知れば、資格取得へ向けたモチベーションを保ち続けるのは至難の業だ。

本学図書館学課程では、2022年度より世田谷区立下馬図書館とのコラボイベン

トをスタートした。「本の病院ワークショップ」は、子どもたちの大切な本にブッカーをかけた壊れた本を修理したりと、司書が普段行っている業務の一部を子どもたちへ提供する場となった。「選書見学」も同様に、世田谷区立下馬図書館資料収集計画等の資料を用いて説明を受けたり実際にバーコードを使用する選書体験を行ったりと、リアルで実践的な学びの場となった。上記のような学習の機会は、図書館学課程科目履修者でないと参加できない。図書館・地域の方々と直接関わることで、学生の中の司書という職業がより具体化されたのではないだろうか。

本課程では、「図書館見学」「和綴じ体験」など他にも多くのイベントを開催している。座学以外の学びの機会に触れ多くの刺激を受けることで、学生の視野が広がれば幸いである。その過程の中で、司書という資格が活かされる場合は図書館だけに留まらないことに気付いてくれればと願うばかりだ。本課程が開いている様々なイベントに参加することで、学ぶたのしさを体感しながら資格取得へ向けて頑張してほしい。(飯村祐乃)

編集 池田美千絵 飯村祐乃 川口華織
デザイン 鷲野宏デザイン事務所
2023年3月31日発行(年1回発行)
昭和女子大学図書館学課程
東京都世田谷区太子堂1-7-57
昭和女子大学日本語日本文学科内